

ハイリスク児の発達と養育環境格差に関する研究

篁 倫子 (お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

1) 研究の目的

発達上にリスクを持つと予想される低出生体重児や、発達障害が疑われる子どもの精神発達・行動発達もまた、健常な子ども同様に養育環境および社会的環境に影響を受けることは言うまでもない(図1)。ここではこれらの子どもの発達と養育環境格差および発達促進の要因を明らかにすることを目的とし、二つの研究を進める。

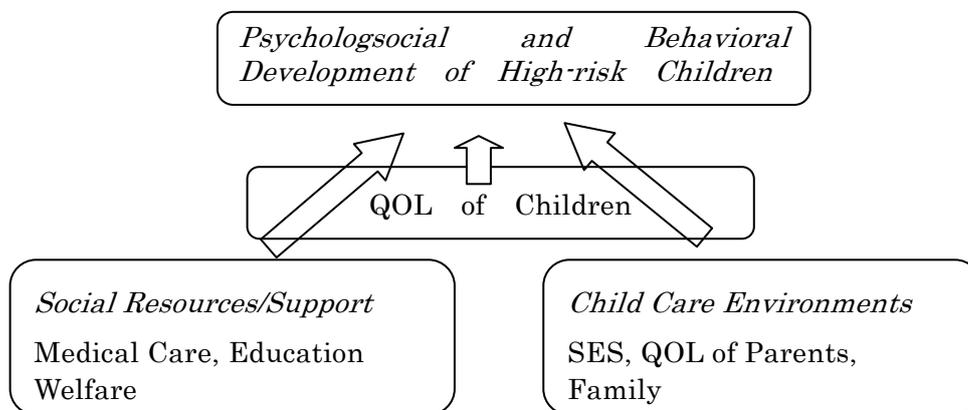


図1 ハイリスク児の心理・行動と社会・養育環境

2) 極低出生体重児の精神発達・行動発達と養育環境：内容と進捗状況

極低出生体重児の就学前健診において身体発育、精神・行動発達の評価と共に、親の養育行動とQOL、子どもの行動とQOLについて質問紙調査を行い、精神発達・行動発達と養育環境との関連を検討する。また、本調査は菅原らの一般児を対象とする研究②(5歳半の保育・養育環境)と一部同じ尺度(NICHD SECCYD、WHO-QOL26、KINDL等)を用い、その結果を比較検討する。これによってハイリスク児の養育環境の特性を把握することが可能となる。

本研究の対象は大学病院母子総合医療センターで出生し、その後も健診を受けている出生体重1,500g未満の極低出生体重児とその保護者である。

今年度はフィールドのフォローアップ体制の変更により、子どもの身体発育・知的発達の評価のみを行った。来年度は全評価を実施する予定である。

3) 発達障害が疑われる子どもの行動発達と養育環境：内容と進捗状況

就学前にADHD（注意欠陥多動性障害）やPDD（広汎性発達障害）が疑われる子どもの行動特性と養育行動・養育環境との関連を検討し、菅原らの一般児を対象とする研究②との比較を行う。対象は極低出生体重児およびクリニック受診の上記障害が診断あるいは疑われる子どもとその保護者である。

また、本研究は、発達障害の社会的認知、医療、教育等の地域差・国家間差について比較検討する予定であり、養育環境グループと国際グループと共同で進めているものである。本年度はカウンターパートのタイ、ベトナム、オーストラリアと調査デザインの検討を行い、来年度は一次調査を実施する予定である。